

2022 年度第 1 回研究会（通算第 6 回目）

- 日時：2022 年 6 月 25 日（土）14:00–17:30
- 場所：オンライン会議室
- 共催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」，東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」

「品詞論」というテーマのもとで、3 名のメンバーが、それぞれの分野内の話題を 35 分で提供したあと、内容について、3 名のディスカッサントおよび他の参加者の間で、30 分程、質疑応答や意見交換を行った。

講師 1：小川芳樹(AA 研共同研究員, 東北大学)

「生成文法の品詞論-前置詞の取り扱いをめぐる変遷-」

生成文法では、Chomsky (1981)で N, V, A, P の 4 つの語彙範疇を「±N」, [±V] の素性の束によって定義する考え方が提唱されて以降、特に前置詞（および後置詞）について、それが語彙範疇なのか、機能範疇なのかをめぐって、紆余曲折が続いており、いまだ議論は決着を見ていない。しかし、おおむねの方向性としては、前置詞は語彙範疇であるとする当初の立場 (Chomsky 1981; Lieber 1984)から、前置詞は機能範疇であるとする立場 (Grimshaw 1991, 2005; Baker 2003; Froud 2001) を経て、前置詞の中には語彙範疇のものもあれば機能範疇のものもあるとする立場 (Roberts and Roussou 2003; Williams 2011; den Dikken 2007; Svenonius 2007)へと収斂する流れが見てとれる。

また、Svenonius (2007)では、Rizzi (1996)が CP 領域に、Cinque (2006)が IP 領域に複数の機能範疇からなる普遍的階層を提案したカートグラフィの流れを受けて、PP 領域にも、P の項となる NP に最も近い位置に生じる K から、AxialPartP, LocP, DegP を経て pP に至る普遍的階層が存在し、in front of などの複合前置詞は、その中の複数の機能範疇主張部を要素が占めるという考え方が提案されている。

また、形容詞から前置詞への文法化とその途中段階にある語彙が、形容詞の性質と前置詞の性質を異なる割合で併せ持つという観察と提案も、Huddleston and Pullum (2002), Aarts (2007), Waters (2009), Ogawa (2014)などによってなされてき

た。

本発表では、これらの理論的変遷とその収斂の方向性について、生成文法を専門としない研究者にもわかる形で概説を行った。

講師2: 米田信子 (AA 研共同研究員, 大阪大学)

「スワヒリ語の「形容詞」

バントゥ諸語は総じて形容詞語幹が少ないが、バントゥ諸語のひとつであるスワヒリ語は、その中では比較的たくさんの形容詞語幹を持っている。しかしながらスワヒリ語においては名詞と形容詞の境界が極めてあいまいである。スワヒリ語の形容詞は「形容詞接頭辞を取って主名詞と一致する語」と定義されるが、形容詞接頭辞と呼ばれる接頭辞は実際には名詞接頭辞と同じものである。また主名詞を伴わずに現れることも可能であり、形態においても現れ方においても名詞とは区別がつかない。スワヒリ語で「形容詞」に分類されているものは、その形と振る舞いを見る限り名詞基盤の体言化 (Shibatani 2017 他) と考えてよさそうである。ただし、「形容詞」に分類されているものでも形容詞接頭辞を伴わずに現れるアラビア語由来のものは異なる振る舞いを見せる。本発表では、スワヒリ語において何が「形容詞」なのか、また形容詞以外の名詞修飾語や名詞と「形容詞」を区別する必要があるのか、という点からスワヒリ語の「形容詞」を再考した。

講師3: 下地理則 (AA 研共同研究員, 神戸大学)

「南琉球宮古語伊良部島方言の形容詞的な諸表現」

本発表は、宮古語 (伊良部方言) の形容詞的な諸表現を記述し、特に品詞論の観点から、これらの諸形式がどのように位置づけられるかを論じた。伊良部方言には、ものの性質を表す語根がさまざまな語形の入力になり、そのさまざまな語形は名詞、動詞などさまざまな品詞にまたがる。このため、当該の語根を「形容詞語根」と呼ぶことは適切ではない。よって、発表者はこの語根を Property Concept 語根 (PC 語根) と呼ぶ。PC 語根は、(a) 名詞と複合して複合名詞として使われる、(b) 動詞語幹化接辞 -kaR をとり、動詞として振る舞う、(c) 重複され、名詞でも動詞でもない品詞上の振る舞いをする語形となる、(d) -f をとって副詞化する、という4つの主要な誤形成を行う。このうち、(c)の重複形は、名詞と

違って項にならず，一方で動詞と異なりテンスなどで屈折しない点で，名詞・動詞と異なる品詞，すなわち形容詞として位置づけた。

ディスカッサント：

岸本秀樹（AA 研共同研究員，神戸大学）

石崎保明（AA 研共同研究員，九州大学）

高橋康德：（AA 研共同研究員，南山大学）